

南岳慧思における『鶖掘摩羅經』の引用

『法華經』と如来藏思想に関して――

鶴 田 大 吾

一 はじめに

慧思（五一五～五七七）の『法華經安樂行義』（以下『安樂行義』⁽¹⁾）には『法華經』は大乗頓覺の教えであり、一切世間難信の法門であると説いている。そして、『法華經』を学ぶ法華の菩薩こそが安樂行を修する最上のものであると明かした。このようにして、『法華經』の重要性を説く中において、一切衆生が法身を顕現すべきであることを述べている。それは、まず一切衆生に仏性があることを示し、六根の清浄を得ることで法身を顕現させることができる⁽²⁾と説くのである。こ

こに、慧思において『法華經』の教えと仏性問題すなわち如来藏思想との関連が重要な問題となってくる。筆者はすでに慧思の如来藏思想として、初期の如来藏系經典である『如来藏經』の影響が見られたことを先に論証し、その重要性を明らかにした⁽³⁾。しかし、南北朝時代において『法華經』には仏性と仏身常住が説かれていないとみなされており、南北の両

地ともに仏性と仏身常住が説かれている『涅槃經』よりも『法華經』が一段劣る教えと判定されていた⁽⁴⁾。このような時代背景において、慧思が『安樂行義』で如来藏思想をどのようにして取り入れたのかを考察しなければならないであろう。

この点に関連して、『安樂行義』では『法華經』と如来藏思想とを結びつける経証として如来藏系經典とされる『鶖掘摩羅經』を引用したことに着目したい。ここを検討するのが本論文の目的である。

二 一乗と如来藏

『安樂行義』によると『如来藏經』（『佛藏經』・『涅槃經』・『鶖掘摩羅經』）の影響があることがわかる。このうち、『鶖掘摩羅經』の引用文が長文にわたって述べられている点に着目したい。そこには、『法華經』の一乗思想との関連において如来藏思想が述べられている。たとえば、『安樂行義』に、

菩薩大慈悲。具足一乗行^ヲ。湛深如来藏^ハ。畢竟無^シ二衰

南岳慧思における『鶡掘摩羅經』の引用（鶴田）

老^一。是^レ名^{ツク}摩訶衍^ノ。如來ノ八正道^ト。へ中略へ云何^ガ名^{ツク}二乗^ト。謂^{ハク}一切衆生^{トハ}。皆以^テ如來藏^ヲ。畢竟恒^ニ安樂^{ナリ}。

（大正四六・六九八中）

とまず『鶡掘摩羅經』を引用する。如來藏について、菩薩は大慈悲あつて一乗の行を具えており、如來藏は衰老がないと述べる。そして、一乗の内容とは一切衆生はみな如來藏有ることだという。この一乗を法華一乗とみなすと、慧思が特に『鶡掘摩羅經』を引用して主張したかったのは、『法華經』の一乗の思想と如來藏思想とを強く結びつけようとするためであつたと考えられはしないだろうか。しかし、この『安樂行義』の文と『鶡掘摩羅經』の本文とは少し違っている。仏が鶡掘摩羅にどのようなものを「一学」と名づけるのかと問い、それに対して鶡掘摩羅は十種をもつて答えている。その中で、

云何^ガ名^{ツク}爲^ス一^ト。謂^{ハク}一切衆生^{トハ}。皆以^テ如來藏^ヲ。畢竟恒^ニ安住^{ナリ}。

（『鶡掘摩羅經』大正二・五三一中）

と答えており、『鶡掘摩羅經』の「為一」・「安住」という語句を『安樂行義』ではそれぞれ「一乗」・「安樂」と変えられている。これは、慧思が『安樂行義』で法華の一乗の思想や安樂行と如來藏思想とを意識的に結びつけようとするための意図的な改変とはいえないだろうか。その根拠として、『隨自意三昧』における『鶡掘摩羅經』の引用文は、

云何^ガ名^{ツク}爲^ス一^ト。謂^{ハク}一切衆生^{トハ}。皆以^テ如來藏^ヲ。畢竟

恒^ニ安住^{ナリ}。

（『隨自意三昧』新出續藏經五十五・五〇四下〜五〇五上）

として、『鶡掘摩羅經』の文をそのまま引用していることより推して、慧思が『安樂行義』ではあえてこの字句の改変をおこなっているのとみることができよう。しかし、『鶡掘摩羅經』が一乗を強く主張し、「一学とは何か」という問いに対する答えの最後には、

云何^ガ爲^ス下一^道。一乗及^ビ一歸。一諦^ト與^ニ一依^一。一界亦^タ一^生。一色^ト謂^ク如來^{ナリ}。是^ノ故^ニ說^ク二^乗。唯一^{究竟}ノ乘^{ナリ}。餘ハ悉^ク是^レ方便^{ナリ}。爾時世尊歎^{ジテ}言^ク。善哉善哉。鶡掘魔羅。

（『鶡掘摩羅經』大正二・五三一中）

といっているため、『鶡掘摩羅經』の「一」の意味として、「一乗」のことを指すものであることがわかる。⁽⁵⁾故に、慧思はその意を取って『安樂行義』において「一」を「一乗」としたのであろう。

三 法身の常住性について

『安樂行義』では、衆生が六根清淨を得ることによつて法身は顕現できるとし、その根拠として衆生の六根が本来清淨なものだからであると述べ、さらに『法華經』の法師功德品と『觀普賢菩薩行法經』を引用し、⁽⁶⁾

法師ノ父母所生ノ清淨^{ナル}常^ノ眼耳鼻舌身意^モ亦^タ復^タ如^シ是^ノ。

（『安樂行義』大正四六・六九八上）
 といつて、本来清浄なる六根は「常」であるという。では、この常とはどのようなものかを確認すると、

常ナルガ故ニ不流ナリ。若シ不流トハ者即チ是レ無盡ナリ。夫レ無盡トハ者即チ是レ如來ノ金剛之身ナリ。問フテ曰ク。云何ガ名ツケテ常ナルガ故ニ不流トス。答ヘテ曰ク。眼常ナルガ故ニ名ツケテ爲ス不流ト。云何ガ名ツケテ常ト。無生ナルガ故ニ常ナリ。（同右・六九九中）

と述べられている。「常」であることは「不流」であることと同義であるとし、「不流」であるとはすなわち「無尽」であり、「無尽」とはすなわち「如來の金剛身」であるという。続けて、なぜ「常」であることが「不流」となるのかという問いに対して、眼が「常」であるので「不流」と名づけるのだとする。また、どのようなものを「常」と名づけるのかという問いに対しては、「無生」であるから「常」とあるとする。つまり、常＝不流＝無尽＝如來の金剛身＝無生となるであろう。そしてこれらのことから結論的に、

菩薩以テ是ノ金剛ノ智慧ヲ一知ルニ諸法如ヲ。無生無盡ノ眼等ノ諸法如即チ是レ佛ナルガ故ニ名ツケテ如來ト。金剛之身ハ覺スルガニ諸法如ヲ一故ニ名ツケテ爲ス如來ト。非ザルニ獨リ金色身ノ如來ニ一也。得ルニ如實智ヲ一故ニ稱ス如來ト。得ルニ眼色ノ如實ノ智、耳聲鼻香舌味身觸意法ノ如實ノ智ヲ一故ニ名ツケテ如來ト。（同右・下）

とあり、菩薩は金剛の智慧をもつて諸法の如が無生・無尽で

南岳慧思における『鶡掘摩羅經』の引用（鶴田）

あることを知る。眼等の諸法の如がすなわち仏であるので、如來と名づけるというのである。これまでの内容をふまえて考えると、眼等の六根が本来清浄で常＝不流＝無尽＝如來の金剛身＝無生等の語によつてあらわされ、それをここでは「諸法如」という語でまとめられている。金色の身だけが如來ではなく、六根と六境に関する如實の智を得る衆生の身もまた如來とされるのである。そしてこれらの内容についての経証として『鶡掘摩羅經』を引用している。

佛何ノ經中ニ説ヒテ眼等諸法如ヲ一名ツケテ爲ス如來ト。答ヘテ曰ハク。大強精進經中ニアリ。佛問フ鶡掘摩羅ニ。云何ガ名ツケテ一學ト。鶡掘答フ佛ニ。一學トハ者名ツケテ一乘ト。乘トハ者名ツケテ爲ス能度之義ト。亦タ名ツケテ運載ト。鶡掘摩羅十種ヲモツテ答フ佛ニ。一答ニ有リ二種一足二十答。今且ニ略シテ説ク以テス。鶡掘摩羅第五答中乃至第六答ヲ。以テ此ノ二處四種答中ニ總ジテ説クニ眼等ノ如來義ヲ。云何ガ名ツケテ爲スレ五ト。所謂彼ノ五根此レ則チ聲聞乘ナリ。非ズ是レ如來義ニ。云何ガ如來義ナリ。所謂彼ノ眼根トハ、於ヒテ諸ノ如來ノ常ニ決定シテ、分明ニ見テ具ニ足シテ無キヲ一レ減ズルコト修スル。云何ガ名ツケテ爲スレ六ト。所謂六入處ニ是レ則チ聲聞乘ナリ。非ズ是レ如來義ニ。所謂眼入處、於ヒテ諸ノ如來ノ常ナルヲ明ラカニ見テ、來入門ニ具ニ足シテ無キヲ一レ減ズルコト修スル。（同右・六九九下）

ここでは、それまでに説かれた内容をうけて、眼などの諸法如が如來と名づけられると説く經典の典拠を問う。そして、『鶡掘摩羅經』を引用して衆生の本来常なる六根が如來であることを明かすのである。内容を確認すると、この經典にお

いて、仏が鶡掘摩羅に一学とは何かと問い、鶡掘摩羅はそれに対して偈をもつて答える。『安樂行義』によれば、鶡掘摩羅は仏に十種の答えをもつて回答するが、ここでは鶡掘摩羅の第五答と第六答によって略して説くという。この二つの回答によって眼等に如来の義があることを説くというのである。

五というのは何か。それはいわゆる五根であるという。そして、如来の義とはどのようなものかという、まず眼根をあげてそれは如来において常であること決定であつて、分明にして明らかに見るという。また、減じたりするようなことはないとする。つまり、六根の解釈において、如来の義の六根とは、それぞれ常なるものであつて、明らかに六境を觀察して減じたりするものではないというのである。次に、六とはどのようなものかという、如来の義の六入處であるという。すなわち、眼入處とは、諸の如来において常なるものがあり、それは明らかに見て、減じたりするようなものではないという。以下、耳鼻舌身意も同様に答えている。このようにして、『安樂行義』において『鶡掘摩羅經』を引用して、六根が如来の義として常なるものであることを述べたかったのであり、法身を顕現するためには六根の清淨を得なければならぬとする⁽⁸⁾、慧思の如来藏思想を裏付ける一つの経証として、この『鶡掘摩羅經』は引用されているのである。

四 結び

慧思の『安樂行義』で『鶡掘摩羅經』を引用した理由について以下の二点があげられるだろう。まず、①『法華經』の一乗の思想と、如来藏思想を説く『鶡掘摩羅經』を結びつけることによって、『法華經』にも仏性が説かれていることを示そうとした。②仏身の常住について。一切衆生は法身蔵を具えその点で仏と同じであり、法身を顕現するとは本来清淨である六根を得ることであり、その六根とは如来の義において常なるものであつて不変易のものであるということを慧思は述べたかった。以上から、慧思は『安樂行義』において『法華經』に如来藏思想が説かれていることを主張するために『鶡掘摩羅經』を引用し、そうすることで、当時『法華經』には仏性・仏身常住が説かれていないとみなされていた点を克服しようとしたのである。そして、慧思は『涅槃經』よりも『法華經』が優位にあるものであると主張したかったのである⁽⁹⁾。

1 慧思の三部作として、佐藤哲英氏は『隨自意三昧』『諸法無諍三昧法門』『安樂行義』の三つをあげ、この順序で成立したと考えられている。佐藤哲英氏『続天台大師の研究』百華苑一九八一年、参照。

2 『安樂行義』大正四六・六九七下〜六九八上

3 拙論、「南岳慧思の如来藏思想の考察」『仏藏経』と『如来藏経』との関連において」（『印度学仏教学研究』五六巻二号二〇〇八年）参照。

4 これに対して慧遠（五二三～五九二）智顗（五三八～五九八）吉藏（五四九～六二三）らによって批判されることになる。菅野博史氏『法華経の出現』一九九七年、『法華経思想史から学ぶ仏教』二〇〇三年・大蔵出版、参照。

5 「安住」を「安楽」としたことについては、『安楽行義』中で「安楽行」の定義を述べる箇所において、「如シニ鴛掘摩羅ノ眼根入義ノ中ニ説クガ。亦タ如シニ涅槃中ニ仏性如来蔵中ニ説クガ。安楽行義トハ者衆多ニシテ非一ナリ。（大正四六・七〇〇下～七〇一上）」¹と云って、鴛掘摩羅の眼根入義とは『鴛掘摩羅経』に説く第五答・第六答の内容を指して、それを安楽行の一つとみなしている。

6 『法華経』法師功德品（大正九・四八上）『観普賢菩薩行法経』（大正九・三八九下）

7 逆に「流」とはどのようなものかという点、「愛トハ者即チ是レ流ナリ。流トハ者即チ是レ生眼ナリ。無貪愛即チ無流動ナリ。」（大正四六・六九九中）とあって、「愛」とは「流」といわれ、「流」とは眼を生ずることであって、貪愛なきことが流動無し（不流）であるといわれることから、「無生」とは貪愛を生じないことであることがわかる。

8 「一切衆生具足法身蔵与仏一無異。（中略）六情暗濁法身不現。如鏡塵垢面像不現。是故行人勤修禪定、淨惑障垢法身顯現。是故経言。法師父母所生清淨常眼耳鼻舌身意亦復如是。」（『安楽行義』大正四六・六九八上）

9 『安楽行義』では『涅槃経』は次第行とされていることから

南岳慧思における『鴛掘摩羅経』の引用（鶴田）

もそのようにいえるであろう（大正四六・六九八下参照）

〈キーワード〉 慧思、『安楽行義』、『鴛掘摩羅経』、『法華経』、如

来藏思想

（龍谷大学大学院）